

新出の伝二条為氏筆六半切と静嘉堂文庫蔵『衣笠内大臣集』

徳植俊之

一 はじめに

衣笠内大臣藤原家良の家集には、『後鳥羽院・定家・知家入道撰歌』と『衣笠前内大臣家良公集』の二系統の現存することがすでに明らかにされている^①。また、古筆切としては家良自筆とされる「御文庫切」や伝定家筆「五首切」が知られているが、このほかにもう一種、二条為氏を伝称筆者とする六半切の存することが田中登氏によって指摘されている^②。

伝二条為氏筆切は、田中氏蔵断簡のわずか一葉しか知られていないが、これが『後鳥羽院・定家・知家入道撰歌』の断簡であること、ただし宮内庁書陵部本と比較すると歌順に異なることなどが、田中氏によって指摘されている。

さて、ここにもう一葉、新出の架蔵（橘樹文庫蔵）断簡が存する。本稿では、まずその新出断簡について報告し、さらに田中氏蔵断簡を含めて、伝為氏筆六半切の本文異同の問題等について考察したい。また、断簡の検討

に関わって、今回静嘉堂文庫蔵『衣笠内大臣集』の調査をする機会を得たので、その調査結果についても報告したい。

二 新出断簡の書誌と本文

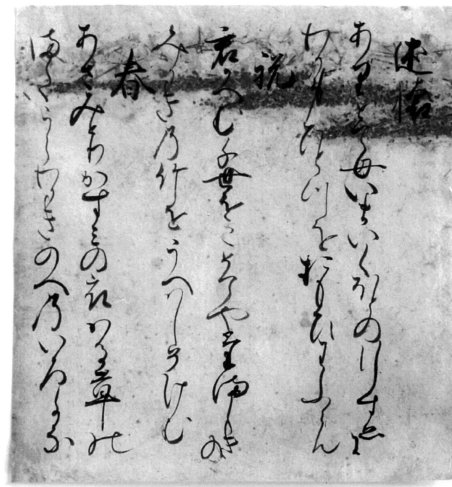
まず、架蔵断簡を紹介する。

断簡の寸法は、縦14・6 cm、横13・5 cm、字高13・3 cm。料紙は打紙加工を施した楮紙で、上部に金・銀砂子及び銀の切箔が雲状に散らされている。田中氏蔵断簡（縦16・7 cm、横15・9 cm）に比してやや寸法が小さいのは、天地及び左右が切断されているからである。和歌一首三行書、一面九行。

極札は「二条家為氏 ありとても」とあり、極印は押されているが、誰のものであるかは不明。書写年代は鎌倉時代後期。

本文は次の通りである。下に『私家集大成』の歌番号を示しておく。

二條家為氏 ありとてみ



〔図版1〕 架蔵（橘樹文庫蔵）断簡

述懐
ありとてまいいくほとに行すゑに
わか身ひとつをおもひわふらん
祝

君かへむ千世をこめてやたましきの
みかきの竹をうへはしめけむ

175

174

春

あさみとりかすみの衣はる草の
またうらわかきのへのいろかな

86

架蔵断簡の三首を、『私家集大成4 中世Ⅱ』『家良Ⅰ』
の底本となった宮内庁書陵部蔵本（函番号「四〇六・二
二」）の該当部分と比較すると、

述懐

有とてまいいく程の行末に我身ひとつを思ひわふら
む
祝

（二七四）

君かへむ千世をこめてや玉敷の御垣の竹を植初めけむ

（二七五）

春

たまきはる命あらはとまたれこし花の盛に成にけるか
な
うき物といひやはなさむ春の風ふけとふかねと花は散
けり

（二七七）

とあり、三首目の詞書までは一致するが和歌は異なって

いる。断簡三首目「あさみどり」の歌は「知家人道撰」の冒頭の歌で（八六、詞書は「春」、断簡と書陵部本とは歌順が異なっている^③）。

また、ツレの田中登氏蔵断簡も、書陵部本の一八三・一八四・一二九・一三〇に該当し、やはり歌順が異なっている。田中氏はこの点について、「これも錯簡本の系統なのであろうか」と指摘する。

〔田中氏蔵断簡〕

| | |
|----------------------------------|-----|
| つれもなくたのむのかりわかるれと かすめる山に月そのこれる | 183 |
| たをやめのかすみの衣かへしても うらみつきせぬ春のくれ哉 | 184 |
| 夏 | |
| 昨日かもわかなつみしは片岡の あしたのはらにしけるなつくさ | 129 |
| 秋 | |
| いろかえぬ竹のはやまに吹風の | 130 |

このように、二葉の断簡いずれも、書陵部本と歌順が大きく異なっている点は問題となろう。この異同は単な

る誤写とは考えにくく、田中氏が指摘されるように錯簡本の系統と考えるのが妥当と思われる。

ここで想起されるのは、同じ二条為氏を伝称筆者にあてて静嘉堂文庫蔵『衣笠内大臣集』（函番号「一〇五・一五」、以下「静嘉堂本」と略称する）である。静嘉堂本は『後鳥羽院・定家・知家人道撰歌』の伝本の一つであり、該本については樋口芳麻呂氏が『私家集大成』解題で「書写年時は格段に古く、歌本文なども純良ではあるが、惜しむらくは、すでに甚だしい錯簡を有した祖本からの転写本と思し、歌序の錯乱が甚だしく、かつ一〇首の歌を欠脱している」と指摘している。（内閣文庫蔵「賜蘆拾葉」（二二七・一一）所収本は、この静嘉堂本の転写本である。）これに従えば、伝為氏筆六半切も歌序の錯乱が見られ、しかも伝称筆者を同じくするので、あるいは、静嘉堂本の欠脱部分に該当するかもしれない。そこで、次に、静嘉堂本との比較を試みたい。

三 断簡本文と静嘉堂文庫蔵『衣笠内大臣集』

まず断簡と静嘉堂本とを比較すると、同じ枳形本ではあるものの、静嘉堂本は料紙が素紙である。また、静嘉堂本の字高は14・0 cmで断簡のそれとは異なるほか、一面行数も、断簡が一面九行であるのに対し、静嘉堂本は

一面八行である。さらに、断簡部分に該当する和歌が静嘉堂本にも存することから、伝為氏筆切が静嘉堂本の欠脱部分である可能性は消え、同書とは別種の本の断簡と考えるべきであろう。

ところがその一方で、両者を比較すると非常に興味深い事実に気づかされる。

まず、一点目は、字形と字母の問題である。伝為氏筆六半切二葉と静嘉堂本とを比較すると、その字形がよく似ている上に、使われている字母、漢字をあてる箇所までがほぼ一致しているのである。わずかに一カ所、架蔵断簡三首目「あさみとり」歌の三句目「はる草の」の「の」が、断簡では「能」のくずしを用いるが、静嘉堂本では「乃」のくずしを使用しているのが唯一の違いで、後は完全に一致している。

二点目は、先ほどから問題としていた歌順の問題である。架蔵断簡部分を静嘉堂本で見てもよい。該当部分は、静嘉堂本の三十丁表から裏にかけてにあたる。本文は次の通りである。

あか月のとりのねきかぬみ山にも
ねさめそよはのほとはしりける

173

述懐

ありとてもいまいくほとの行すゑに
わか身ひとつをおもひわふらん

祝

君かへむ千世をこめてやたましきの

みかきの竹をうへはしめけむ

「三十丁オ

知家

大宮三位入道撰

春

あさみとりかすみの衣はる草の
またうらわかきのへのいろかな

86

(以下四行略)

「三十丁ウ

つまり、断簡の歌順は、静嘉堂本の三十丁表の二首目詞書から裏にかけての歌順と一致するのである。もちろん「知家／大宮三位入道撰」とする題号部分がないという問題は残るが、両者の歌順が一致する点は注目すべきであろう。

では、田中氏蔵断簡の場合はどうであろうか。まず、初めの二首は静嘉堂本十七丁表に該当するが、後の二首

175

174

は十八丁裏に該当する。

静嘉堂本のこの部分は次に示すとおりである。

(三行略)

つれもなくたのむのかりはわかるれと

183

かすめる山に月そのこれる

たをやめのかすみの衣かへしても

184

うらみつきせぬ春のくれ哉

夏

「十七丁オ

なには人ひかすふりゆくさみたれに

185

ころもほすとやあしひたくらん

そてふるゝ花たちはなにちきるとも

186

たかしのふへきゆくすゑもなし

秋

ふるさとのみまくほしさのいさなひに

187

ゆきてはきぬるはつかりのこゑ

いくかへり月みしあきはすきぬれと」十七丁ウ

188上

なかむるまゝにぬるゝそてかな

あきされはしもをきまよふ麻のはを

112下

よはにふみわけしかはなくなり

113

冬

さてもなをこのはの色やまさるらむ

ちりしくにはにふるしくれかな

恋

伊勢の海のをのゝみなとのをのつから」十八丁オ

115上

ちりつもる花のうへふく春風に

128

またふりかはるにはのしらゆき

夏

昨日かもわかなつみしは片岡の

129

あしたのはらにしけるなつくさ

秋

いろかえぬ竹のはやまに吹風の

をともしやかに秋はきにけり

「十八丁ウ

130

実は、静嘉堂本では、十六丁表から十七丁裏までは書陵部本と歌順が一致するが、十八丁表は書陵部本一一二下句から一一五詞書まで、さらに十八丁裏は一二八に飛んでいる。十八丁表の「伊勢の海の」の歌から、十八丁裏の一行目「ちりつもる」の歌本文は続かないのである。同じ丁の表と裏で明らかに歌が続かないということは、

これは、親本の錯簡等による本文の乱れを忠実に書写した結果であるということになる。つまりこうした歌順になるのは静嘉堂本の特徴なのである。とすれば、ここで一つの仮説が成り立つだろう。

静嘉堂本そのものかそれと同じ本文の親本を書写した際に、まず、断簡筆者は十七丁表まで書き写す。断簡部分には「夏」という詞書までが書かれている。ところが、その丁をめくった際に、紙が重なっていたなどの理由で十七丁裏と十八丁表を合わせてめくってしまったとする。十八丁裏の一首目は明らかに春の歌で、なおかつ二首目には「夏」の詞書があるので、筆者はそのまま十八丁裏の二首目以降を書き写した、と考えると、断簡本文の歌順の説明がつくのである。

つまり、伝為氏筆切は静嘉堂本ときわめて近しい関係にあると言えよう。可能性としては、伝為氏筆切が静嘉堂本の転写本であったか、あるいは親本を同じくする兄弟本の関係であったかのいずれかであろう。田中氏蔵断簡の一首目「つれもなく」歌の二句目が、本来「たのむのかりは」とあるべきところ、断簡では「たのむのかり」と「は」字を脱落していることも、両本の成立順序を考える際には重要である。

ただ、その際に気になるのは、断簡が装飾料紙を用い

ている点である。これを清書本と考えると、本文の杜撰さが目につくとも言える。装飾料紙を用いているがゆえに、誤りに気づいてもそれを反故とせず、また、題号も美観を損ねるという理由で削除したのかもしれないが、現時点ではこれ以上のことはわからない。いずれにしても、断簡が静嘉堂本ときわめて近しい関係にあり、その忠実な転写本かあるいは親本を同じくする兄弟本の関係にあると断定できるのである。

四 静嘉堂本について

最後に、伝為氏筆六半切ときわめて近しい関係にある静嘉堂本についても今回調査する機会を得たので、その結果明らかにした点をいくつか指摘しておく。

まず、書陵部本に対する歌順の大幅な異同であるが、これは明らかに静嘉堂本の歌順の方が乱れている。すでに指摘したように、静嘉堂本の十八丁表と裏の本文は、表に書陵部本一二下句から一二五上句（伊勢の海の）が書写され、裏は一二八から一二〇が書写されている。

恋

伊勢の海ののをのゝみなとののをのつから」十八丁オ

ちりつもる花のうへふく春風に

またふりかはるにはのしらゆき

128

表裏いづれも一面八行で書かれており、「伊勢の海の下句が存在した痕跡はない。また、裏面の一二八は春の歌で、「恋」とする詞書ともつながらない。これは明らかに静嘉堂本の歌順の方が乱れている。

その歌順の乱れであるが、たとえば四丁の表は二一から二四上句の歌を書写するが、裏は一八下句から一九二上句までを書写するというように、同じ丁の表と裏で大きく和歌が飛んでいる例が何カ所が見られることから、これは該本の錯簡によるものではなく、親本の段階で生じた錯簡によるものであろう。

ただし、歌順が同じ一面の中で変わることはなく、異同する箇所は、必ず丁の表と裏か、あるいは丁が変わる部分に限られている。ということは、静嘉堂本は親本と同じ一面行数で書写していたことになり、親本をかなり忠実に書写していたと推定されるのである。

その親本であるが、錯簡を起こす前段階の本文は、書陵部本と同系統の本であったと断定できる。静嘉堂本と書陵部本の歌順を比較すると、部分部分では一致しており、ブロック単位での異同になっているからである。

その親本を忠実に写したため、静嘉堂本では途中何か所か本文上の矛盾が生じてしまった。たとえば、二十丁表の最終行には、「春」という題があるが、それが現在では擦り消しされている。どの段階であるかはわからないが、本文上の矛盾に気づいた誰かが、消したのであろう。

静嘉堂本では、これ以外にも本文上問題のある箇所は擦り消す傾向にある。九丁裏は書陵部本八一下句から八四までを書写し、最終行一行分を擦り消してある。続く十丁表は一面白紙である。一方、書陵部本では八四の次は、

郭公こゑまつころや山かつの（以下空白）

（三行分空白）

となっている。おそらく静嘉堂本でも同様に書写されていたのであろうが、一首の上句だけで、次丁が白紙であることからこれを擦り消したのであろう。また、十五丁裏の最終行はおそらく「恋」と書かれていたはずであるが、続く十六丁表の一行目に「春」と詞書があるので、このままでは矛盾が生じてしまうことを避けて擦り消したもののと思われる。

秋

ときは木のなかにまされるうす紅葉
いろこきよりもおくそゆかしき

(一行空白)

「十五丁ウ

春

たまきはるいのちあらはとまたれこし
花のさかりになりになる哉

176

136

このほかにも二十丁表の最終行「春」とあったか)、
二十七丁裏の最終行「恋」とあったか)などに、擦り消
しの後が見られる。もっとも、こうした処理は、先ほど
挙げた十八丁表の最終行のように明らかに上句だけであ
るのに消されずに残されている部分もあるので、すべて
の箇所で施されているわけではないが、おおむね錯簡本
文であるがゆえに矛盾の生じた箇所は擦り消す傾向にあ
ると言えよう。

本文上の矛盾とは異なるが、擦り消しに関しては、も
う一点興味深い箇所がある。それは、「京極入道中納言撰」
と「大宮三位入道撰」と書かれた見出しの部分である。
まず、「京極入道中納言撰」であるが、この右側にはおそ
らく「定家」と書かれていたはずであるが、それが擦り
消されている。逆に、「大宮三位入道撰」の右傍には小さ

く「知家」と書き足されているのである。この「知家」
は墨色が薄く、後人によるものかもしれない。一方は消
し、もう一方は書き足すというのはなぜなのか、また、
これは同時に行われたのか別人物によるものなのか、現
時点ではそれ以上のことはわからないが、注目される事
象である。なお、これら擦り消しされた部分を、静嘉堂
本の転写本である内閣文庫本で見ると、空白行は詰めて
あり、また「京極入道中納言撰」「知家大宮三位入道撰」
と静嘉堂本の現在の姿と一致しているので、これらの擦
り消しや補筆は「賜蘆拾葉」所収本が作成された時点で
すでに存在したことになる。

それからもう一点、本文上で注目されるのは、書陵部
本一四二は上句と下句の間に二行の空白があるが、静嘉
堂本ではそれがないという点である。

〔書陵部本〕

なかれいつるうらやま川のおちはひに(以下空白)

(二行分空白)

ひかたすくなき五月雨のころ

〔静嘉堂本〕

なかれいつるうらやま川のおちあひに
ひかたすくなき五月雨のころ

一首の意味としてはつながるので、静嘉堂本のままでもよいと思われるが、それではなぜ、書陵部本でこのよう

な空白行が生じたのか説明がつかない。ここに下句と上句があったと考えると、それを見落として一四二上句に次歌の下句を続けて書写してしまったという可能性はあるが、その場合は空白行は生じないはずである。あるいは、書陵部本の親本では、一四二上句の後に別の歌の下句と上句が書写され、それを墨で消したか擦り消しされていたのではなかったか。そう考えれば、静嘉堂本の親本ではここには空白行はなかったと推定されるから、静嘉堂本の形が本来の正しい本文であった可能性もある。以上、静嘉堂本について、今回の調査で判明したことを述べた。まだこのほかにも検討すべき点は多くあり、また静嘉堂本の転写本といわれる内閣文庫蔵「賜蘆拾葉」所収本についても指摘すべき点はあるが、それはまた別稿を期したい。

〔注〕

- (1) 『私家集大成』「家良」解題（樋口芳麻呂氏）。
- (2) 『続々国文学古筆切入門』（和泉書院）五九（134頁）。
- (3) 別系統の『衣笠前内大臣家良公集』では、断簡一

首目「ありとても」のみが見られ（三三八三）、続く二首は入集していない。

〔付記〕

貴重な典籍の閲覧及び調査を許可してくださった静嘉堂文庫に厚く御礼申し上げます。

なお、本稿は文教大学共同研究「古代・中世文学に関わる古典資料の調査、紹介と解釈についての研究」の成果の一部である。

（大東文化大学特任教授・本学非常勤講師）

歌舞伎鑑賞教室「新皿屋舗月雨暈―魚屋宗五郎―」

血は抗えないもので、親父のような酒呑みにはならぬと子供の頃から思ってたものの、成人したその年にはもう呑兵衛だった。全く、どんな事でも起り得るものである。

どうせなるなら立派な酒飲みになりたいものだが、身近に反例があるので油断はしていられない。というのも私の祖父がものすごい酒呑みで、酔って車で他人の家に突込み、二度新築した。それだけにとどまらず、線路で車を走らせ電車を止めたこともあるという。それでいてタクシー会社を立ち上げさらには繁盛させたのだからすごい時代もあったものだし、十数年前に亡くなるまでにその儲けを全部使い切ったことを考えると、なんだか世の中にはすごい人がいるものである。

家系図を紐解くと私の一族の男は皆極めて早死のようだが、それでも均せば六十くらいにはなる。そこから考えるに私もあと四十年は生きそうだが、その間祖父のように何事かをしでかさないとも限らない。飲酒運転が免停だけでは済みそうにもないこのご時世、どうせなら宗五郎のような、酌量の余地がありそうなところでやらかす方が娑婆への戻りも早そうに思えるがどうなのだろう。とは言ってみたものの、酒は呑むとも呑まざるな、何事をもしでかさぬ立派な酒呑みになりたいものである。

(日文三年 板垣成彦)